

口頭発表「旭山動物園の小学校教育プログラム」

坂東 元



1 はじめに

旭川市では、小学校で生物（哺乳類，鳥類）を飼育している学校はごく少数であり，生活科での動物の継続飼育，生命の気付きなどについては，魚類の飼育や動物園でのウサギモルモットなどのふれあいガイドなどを活用し，何とかこなしているのが現状である．学校でのウサギやモルモットの継続飼育は様々な理由から困難だと判断している場合が多く，飼育に関しての明るい方向性は見いだすことができないのが現状であると推察される．

2 終生飼育が困難だとする学校側の理由

動物園側から見て分析すると以下の理由などがある．

(1) 教員に動物を飼育した経験者が極端に少ないこと

経験者の人事異動により，継続飼育ができないとの判断になる．

(2) 「命は大切」が飼育することのハードルを高くしていること

正しい知識，飼育方法にこだわりすぎていること，死をどのように伝えるのか方針がない．

(3) 休校日の飼育，疾病罹患時の対応，飼料費など現実的な負担が大きいこと

(4) 何よりも飼育本来の目的を見失い，飼育の手段方法論が先行し，飼育は困難と判断する傾向があること

いずれも教える側の理由であり，そのことによってこどもが本来受けるべき教育が受けられないことにつながっているのは本末転倒といわざるを得ない状況である．

以上を踏まえて旭山動物園では，教育活動として各種学校と連携したガイドを積極的に実施している．2010年度のガイド総数は203件で，このうち小学校対象が100件うち生活科での利用が46件であった．ガイドの内容は，家畜ペット種を飼育展示している「こども牧場」でのふれあいを中心としたものが32件，動物の貸出が7件であった．

3 旭山動物園が，動物の貸出を行うようになった理由

私達は，以下の事を考慮した．

(1) 短期間でも飼ってみたいという動機付け，ずっと飼っていたかったという心を育てる授業展開が可能だと判断していること

(2) 学校（教員）の負担の軽減ができること
動物園が疾病時の対応，実際の飼育のサポートを全面的に行うことで，短期間とはいえ動物飼育を決断する学校が潜在的にたくさんあること

動物の貸出は生活科本来の目的を達成するために，園内のこども牧場で飼育しているペット・家畜種（主にモルモット・カイウサギ）を学校へ貸出を行い，「命のあたたかさ」や「命の大切さ」，そして「動物の気持ちになって考える」を念頭に置き活動を展開している．

しかし，ただ単に動物の貸出を行っているわけではなく，旭山動物園の職員（教育担当とこども牧場のスタッフ）が学校へ行くか（出前授業），または園内のこども牧場で，動物との出会いの場を設け，動物とのふれあいをきっかけに様々な活動を展開している．今回は，生活化での学校への動物の貸出（3週間から6週間）による授業展開の基本的な事例を紹介する．

4 学校との話し合い

旭山動物園では，このプログラムを使って下さい，といったパッケージ型のガイドは行っておらず，学校の先生の意図する授業の目的と動物園が提供できる内容とをすりあわせ協議を行い，授業の指導案を作成してもらいガイドを行う．動物の貸出は特に入念に打ち合わせを重ねる．動物の飼育は本来レンタルするものではなく終生飼育

をすることが基本であることから、都合のいい時だけ飼うことにならないよう、また先生の授業消化のためのレンタルにならないように動物園側の考え方や飼育方法などを説明している。動物を貸出する理由は学校側の動物飼育が困難な状況をふまえたものである。

(1) 貸し出し期間

貸出期間を3週間から6週間と短期間に設定しているのは、こどもの集中力を持続させ、返却時の喪失感、悲しさ、もっと長く飼っていたかったに繋げるためである。数ヶ月単位での貸出は、飽きること、どうせ返すんだからという気持ちになりかねないと考えられる。話はそれるが、飼育を推奨しているカイウサギやモルモットは寿命が長く学校にとっては終生飼育であってもこどもにとってはある学年での関わりであり終生飼育になっていないことは教育の観点からは十分に考慮しないといけないと考える。

(2) 動物の貸出しでの指導案ポイント

- ① 飼育したくなる動機付け、こどもの主体性
- ② 飼育中、返却時の振り返り
- ③ お別れの悲しさ、寂しさ

以上の3点を考慮して指導案を作成してもらうようにしている。また、貸出期間中に動物が死んでも、動物園は一切責任は問わないことを伝えている。また学校には、子どもから死体を隠すことをしないよう、そして決して子どもを叱らないようお願いをしている。死に際しては、どうして死んでしまったのかを理解することが大切であり、もしも死んだ場合は動物園の職員が出向いて子ども達に説明と慰めなどの話をする事と事前に決めておく。

5 授業展開

(1) 動機付け・こどもの主体性



写真 1

学校への出張授業(写真1)、園内のこども牧場でふれあい活動をとおして、飼ってみたいという動機付けを行う。触れあうことでかわいいという感情が生まれ飼ってみたい繋げることは比較的容易なことであるが、命を預かることは、都合のいいところだけを見ればいいだけではないこと、かわいいところ、怖いところ、イヤなところも全部認める気持ちを持たなければいけないことも伝え、飼育するために必要なものや大切なこと(掃除, エサ作り, 観察の仕方など)を確認する。確認の仕方も子どもたちに実際に聞きながら、子どもたちの声を大事にし、全て黒板に書き出し、一つ一つ確認する方法で行っている(写真2)。

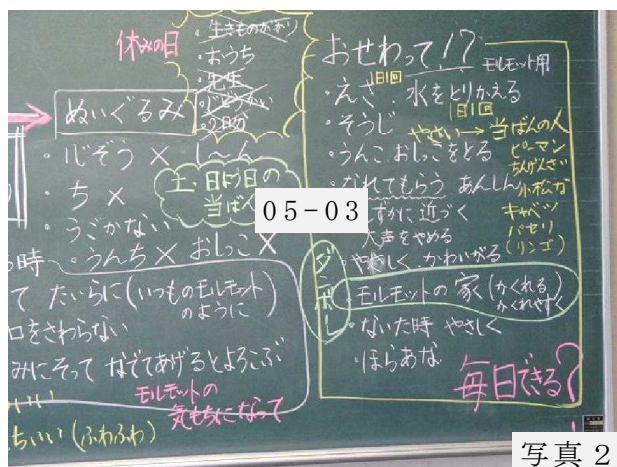


写真 2

学校が休みの日(土・日・祝日)はどうしたらいいかということも考えてもらい、「動物の命に休みがあるか」という問いかけから、休みの日もしっかりと子どもたちが飼育しようという結論に導いている。子どもたちが当番を決め、学校に来て飼育するか、子どもの家に持ち帰り飼育をするかは学校側で決めている。

(2) 飼育中・返却時の振り返り

継続飼育をしている期間は3~6週間で、継続飼育している期間中(写真3)に、子



写真 3

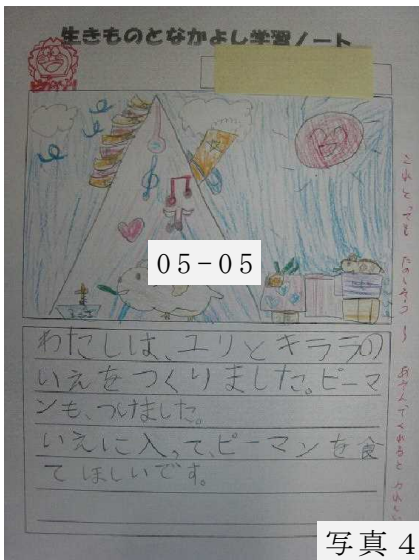


写真4

供たちには抜き打ちになる形で学校へ様子を見に行き、アドバイスをし、残りの期間、より一層良い活動を行えるように促す。また毎日飼育日誌を書かせることで（写真4）、やりっ放しではなく常に振り返りに繋がるように心がけている。さらに返却日は決まっていることから飼育期間中の動物に対する思いや、これからどうしたいかなども絵にしたり文章にしたりし、まとめの授業を展開していく（写真5）。



写真5

(3) お別れの悲しさ・寂しさ

返却時は、動物園に来てもらうかまたは



写真6

学校でお別れ会をする。子どもたちから動物への感謝の気持ちや、思い出を発表するなどして動物園の職員が動物を受け取る（写真6）。その時の子どもたちは、寂しい気持ちや感謝の気持ちから泣いてしまう子どもも多く、飼育体験をとおして命の大切さや親しみ、身近にいなくなる悲しみを芽生えさせることができると考えている。

(4) 貸出授業その後

単元終了後は、子どもたちは動物園によく遊びに来て（写真7）、貸し出した動物



写真7

に会いに来る。学校の先生に聞くと、子供たちはその時の動物の様子など事細かに教えてくれると言う。

動物の貸出という短期間の生き物との関わりであるが、カリキュラムの組み方によって、生活科の本来の目的を達成するための有効な手段になりうると考えている。

6 課題

貸出授業をおこなった学校は翌年も継続するケースが多いが、最初の熱心な先生が移動した後、新任の先生が「昨年と同じ内容で」といったケースも目立つ。やはり教員の「やる気」や「目的意識」を高めることがおおきな課題である。教育委員会あるいは動物園主催の教員研修を行う、貸出授業の様子をホームページで紹介するなど「動物を飼育」することの大切さや効果をアピールしていきたい。

（旭山動物園園長）